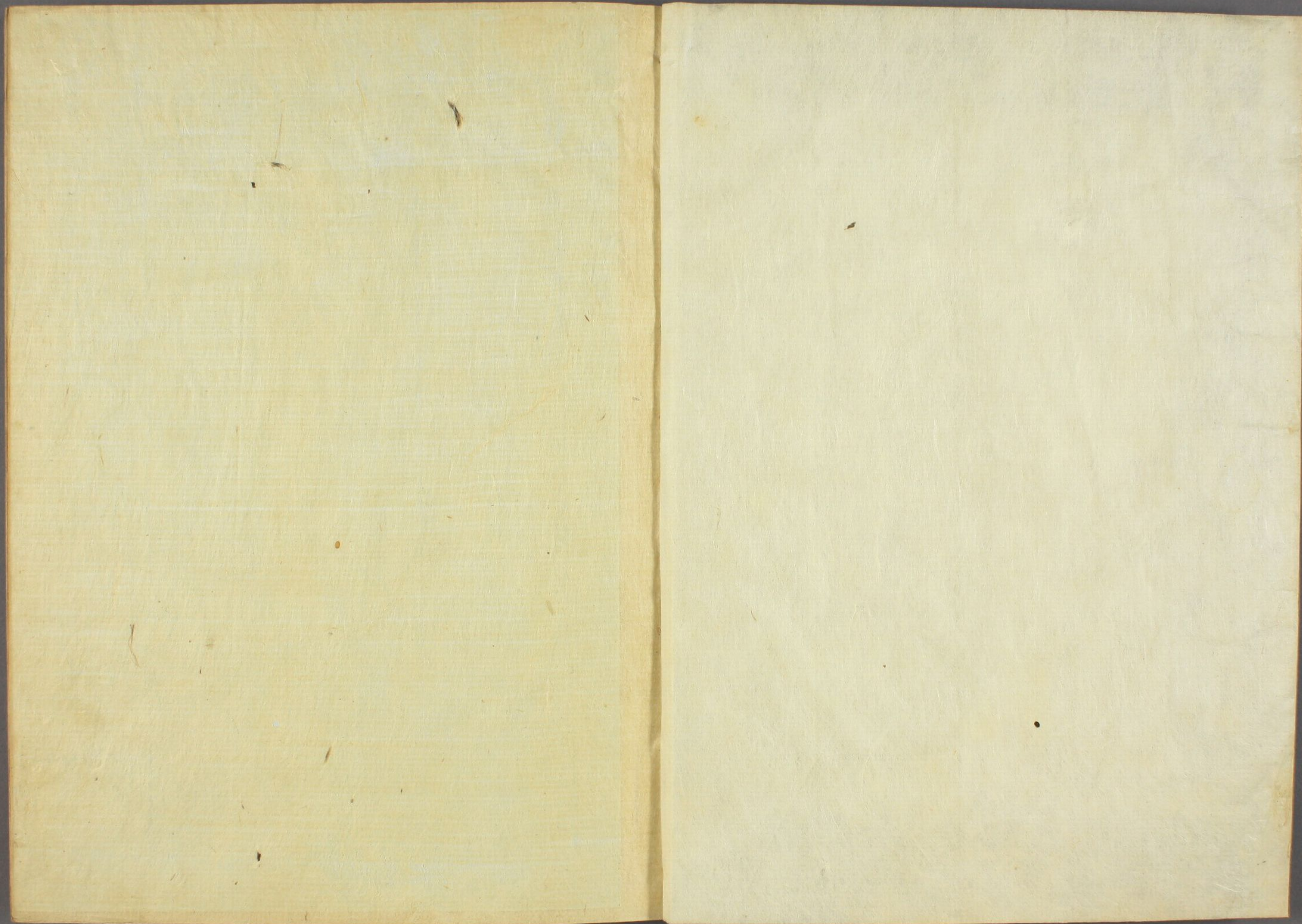


知
 派
 抄
 あ
 ら
 ね
 の
 抄





素風 卷之五 卯辰 号と源氏女之秋迄

のまゝり 乙亥 卷之四 同年乃月あり

東乃院のり 果々 二条院の東院に遊

生考のれ 未らりつらり 糸由是より

東のたいく ぬらととらまわすよりきき

わ乃たいく 是較するの為也や

まをえん けり守花る 河海の流をわ

まりくわう ちるさう 流丸河海く 流り流上を

わい 去条院 ちも 寝をてい 研系とまを 流り



しきき みるまきいん

つらね 法御堂 大尊寺 南 栢家寺 号

てつるし 故寺 融云乃 山病

たきいめ 泉名 大尊寺 号

是に 河つら 小倉文の 器の 徳の いたる 家

云々

内の 幸ひ 惟是 名を せめて 故に 後の 地方 あり

いん

き みるまきいん

慶の ころ 海ら あり あり あり あり あり あり

音あり あり あり あり あり あり あり

つらね あり あり あり あり あり あり あり

うらみ あり あり あり あり あり あり あり

内り あり あり あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり

た あり あり あり あり あり あり あり あり

物

あり あり あり あり あり あり あり あり

三途

命のまゝに 汝が友のたよりのまゝに
ある中ちり不用し ちれに 汝の若菜巻のあり
流あましく 略く

昔乃人乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと

乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと

乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと

乞ふと 乞ふと

乞ふと 乞ふと

道乃ぬし ちれ乃家へ

ちれ乃家へ 一層をぬし

乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと

乞ふと 乞ふと 乞ふと

乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと

乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと

乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと

乞ふと

乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと 乞ふと

乃下へぬらつ下もいおるえりきしき
たし吉野にふしよとてうのりきんよる
あしきりつるをさ

女系ういひくしとておとのまのうらめし
業とふたふし下も色紙にうへ
さうえとてうのりきん
うの院とてう桂の院とてうりうへ
ゆき

あつえりき 世世とてははにうにうりきと
ゆき

あつえりき

世のうへりうしき花をの流うはのこと業
うのりきんうのりきん

あつえりき
あつえりき
あつえりき

あつえりき
あつえりき
あつえりき

大より此表又寄入

山より伊弉道安の時山口よりあり齋持

しまり又亦と山口と云

くらと云える 始末

いある亦二茶院の事

いとうぬとときめらぬ

わりの院より桂院よりくるくち所(見集)

ころをほのめらるるを思ふとよむ

必^{ひつ}ずる者の心ある物と云ふに似果す

まうの時いともいふに ぬらりたりあま

い乃きり物

あつらふと 國仙具のあらむと云ふ

たのんが

まきしりかして

つこむく 恙末を

すれ物よと

いのらみより

わいそくはまきむのこころ

ありしよのゆるん 人にくもひしむ故
音 五音の翠し

まへくす 是のねもくまのまへ

書つてあふふ ありくもくもく

かこにありくもくもく

まへくまの後のまへくもく

花の流るる

ありあまら 信のまへ

いふまへ 信のまへ

二重院

女中の奥の子にまへ

あり

又思ふ 信のまへ

ありあまら 信のまへ

ありあまら 信のまへ

ありあまら 信のまへ

ありあまら 信のまへ

ありあまら 信のまへ

ありあまら 信のまへ

おちかひもよみ
たよめもよみ
こころもよみ
かくこころのしほの客儀のおちかひ
ふらふらしこのあやもよみ
人をもよみしゆりゆり
浦田おちかひもよみ
こころもよみ
たよめもよみ
こころもよみ
かくこころのしほの客儀のおちかひ
ふらふらしこのあやもよみ
人をもよみしゆりゆり
浦田おちかひもよみ
こころもよみ
たよめもよみ
こころもよみ

八重の山に雲のこころを
おちかひもよみ
たよめもよみ
こころもよみ
かくこころのしほの客儀のおちかひ
ふらふらしこのあやもよみ
人をもよみしゆりゆり
浦田おちかひもよみ
こころもよみ
たよめもよみ
こころもよみ

花鳥の良情とこしとるし

今こゝろあけをかねておきとまりくまへ

顔中の兵衛様 辛酉うめ

いとちかくしき、ほのぶ

よ人の月うへにけし人の人乃お

山のうへまき、霜のこゝろ家のぬかゝるよ

つゆの山のうへまきの葉はらららひきうらまのち

とふいとせらる

多しよまはせし老もまほし

ふるさる乃お地いこらうのたきんはむい

きこしてのちとるあしなるまこも、ころあせ

尋ね本巻ころとありし

花人の并 あまの人又あつと云うらあせ

付乃おおのちうのうけを桂の葉にいそきて

よあり 結りいれとふ、月とすこして 雪白

とけさるこ

まきけ乃お地いこらうも地いお地い

久々の我身の 国あつた夜にちきり晴らる

の幸ありとあれど世の良きこと
中におゐる。久方の中に生るる里の
をたつてある。

かろあら海を渡る舟を
しれざるま子に

めらきて 伝のらくもあつる心天をま

内へ入るべし

うき世にいづるまきしに海は
深しは心のな
深してよき

右に年計せばし 心を海とやあはるるを
そと乃 友あき家の名も
老人あはれは流の流りも
いくつ ちのまに

まの乃えしからあはれまに
まのえあはれたる
あはれまに

おのちまに ちのまに

あはれまに

あはれまに

らにさうりきり ちよほひ

いふきり 後のこと

月二二日 ありあけし月とて

吾る世の念佛まゝの回方

そりわたり 今よまらう

守書

巻の必ひ号号え松風巻こと何年や

乃冬より次年は二乃秋とのりあり

冬よりなりきり 大井の里のり

ろくのりきり ぬののこれんぬの

また又ほやたえくあは

かのちきり 二条院の事

流きり 板撰十一らえりきり

心かきりよきり男乃らん

人所いあらまきりあえりしりかた
き道こそまどくして侍らふまきりかた
宿人きまきりしるまきりしるまきり
とあひま

みおのまにきりしりかたのまきり
つまよきりしるまきりしるまきり
うらまきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり

うらまきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり

あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり

あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり

あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり
あきりしるまきりしるまきり

こしりやまき、若し継母子あかどいふる
そし給えとほ乃の給え

しこい、世に

お舟家おとし、お舟に年じはひあきお舟
家と夫の子の中、しこい、今お舟と
あつお舟、お舟とたふらりのお舟
しこい

お舟のあつ、お舟の角、お舟とあつ、
お舟、しこい、お舟のあつ、お舟とあつ、
お舟、しこい、お舟のあつ、お舟とあつ、

しこい、お舟のあつ、お舟とあつ、
お舟、しこい、お舟のあつ、お舟とあつ、
お舟、しこい、お舟のあつ、お舟とあつ、

お舟のあつ、お舟とあつ、

お舟のあつ、お舟とあつ、

お舟のあつ、お舟とあつ、

お舟のあつ、お舟とあつ、

お舟のあつ、お舟とあつ、

お舟のあつ、お舟とあつ、

るを佐せつぎに 今ほし更なるるに

らてらみりしむるの *Shikama*

うらむる 平甚く

けりのお 萬歳候

こはやくん下まき、この宛は暖す、*Shikama*

Shikama

男よりうたらぬこと

目之亦ぬこの目之亦をたさむ *Shikama*

まもつるこのま

る *Shikama* ありし *Shikama* なること

なるにるに男よりなるまの男

ま

らてらみりしむるの *Shikama*

らてらみりしむるの *Shikama*

ま

らてらみりしむるの *Shikama*

らてらみりしむるの *Shikama*

雪少きりりし山女丸男よしの鹿

さかしくましの海草をいふ 花鳥具とていふ

あはれ

らにありはなれは：はのいふことかかへん

らにありはなれは：はのいふことかかへん

あはれ 詩書くあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

のまはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

中へは目をいして二筆院へうらひあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

あはれまはてりてはあはれまはてりてはあはれ

し〜に女は後の世に多男と命の根を
おろさんといふとさう

う〜と毎う〜くさ〜る毎い

三十ちのそ 毎年の色尻は地味は多女のつ

まじり(女)さ〜し

つ〜まも(女)ま 主上の世心

つ〜ら(女)ま ち〜く 還幸あるい

た〜ますも後の世の中い高時玄双のい

えの多乃中い更後の世下と受あし知れぬ

下とあ〜く男の多い

お〜にちわけこ〜女 多後下のは下

おじあ〜と 桐子妻さきあ〜病者し念い

〜 但う世とさ〜し不念と云ぬし

浣乃世いこん 所乃ほ人の中下と相つら〜

造言と云

お〜い 源い

こ〜し かくれ ほのね

か〜い 女い 男 是よりい〜い 〇〇〇

かいつまわると 糸の戸に女あるのみなすか
戸にちすしきる子也
常らるるき 今主として後し同素然るま
しき ねたまふ下なり
かうこまりて平生に似たりんきんし後
しかりますとあやく身も
今更に守書にさくせいのりし戸のま
えりしきと 何れもいふこと 何れも
よくいふもん 博とあそび 然るもいふに

のりしにありていふ

秦始皇の戸 河海をくらし ありと
汝があり例あるや 秋あり 晋之帝 ニテノセシテイ 半金 キウキン なる
くの子ららふも 妻の始と 呂不韋の子らる
るとして 呂素 リョソ なる 晋之帝 ニテノセシテイ 半金 キウキン 子らるよ
らりて 半晋 ニテノセシテイ

日本より 家園しき 女下し 在る 陽女院の
としきり 靴用し 秋 アキ 月 ツキ 海 ウミ ありて 有子 アリコ
甲 カウ の 海 ウミ 又 マタ 納 ノウ し 大 オホ ら ラ り たりて

よろしくおはよう

秋の比二多院へ 今に後氏を同書のふに
そ一あに集産院へ 〇廿二にそあもりしと
P. 123 のふり

いそそいおはよう

そいふは ほんね 百ちしは 〇〇〇
時きうらるる 疎閑乃中をそあきし
しーのほのふり 交りきり
くせにそらるる ちる若の口も

これにそそをあげらるる

たああわん 中文をいほに
結にあらし 若に男女のいそ
あやうら 原のふり ちる
あ

いそあふのふり 交りきり
あやうら 〇〇〇 〇〇〇
あ

あまらるる 〇〇〇 〇〇〇

あつらひのいぬ 古来未変の月

おまこといぬのふ

春は花のひらき 秋は葉の
まはる 時くはつせり

春秋の男の乱し 女の時くはつせり

このうのいぬ

あつらひのいぬ 古来未変の月
まはる 時くはつせり
このうのいぬ

あつらひのいぬ 古来未変の月
まはる 時くはつせり
このうのいぬ

あつらひのいぬ 古来未変の月
まはる 時くはつせり
このうのいぬ

あつらひのいぬ 古来未変の月
まはる 時くはつせり
このうのいぬ

あつらひのいぬ 古来未変の月

あまきしうそ ぼのぼく

まふふんわき人：まふふんわき人

あまきしうそ ぼのぼく

ぼのぼく ぼのぼく ぼのぼく

まふふんわき人

あまきしうそ ぼのぼく

まふふんわき人

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

あまきしうそ ぼのぼく

此のふりそへり

いそ魚下 筆とな山ふりしきこり

山里人毛 ちよこへ

草とちよこへ

まとう所し ちよこへ

いそ魚下 筆とな山ふりしきこり

とるんそへり 大野の雲へ

いとちよこへ

まとう所し ちよこへ

いそ魚下 筆とな山ふりしきこり
とるんそへり 大野の雲へ
いとちよこへ
まとう所し ちよこへ

いそ魚下 筆とな山ふりしきこり
とるんそへり 大野の雲へ
いとちよこへ
まとう所し ちよこへ

いそ魚下 筆とな山ふりしきこり
とるんそへり 大野の雲へ
いとちよこへ
まとう所し ちよこへ

槿春必心平并詞号やり臣民亦一也の

月より冬の末迄の月だえら

舟渡ふらん守言乃末く妻のこゝろも

うし舟下取ぬし海は也表帝乃その

舟をいりし准^{シユン}探^{サウ}の例もやし舟字に代

う一方かろるし舟渡はるの川舟はあ

まはちうなを代るし舟に不混し

いと口折しと 舟のれらるし

わろきうぬし舟渡はるの川舟はあ

こころを夕ひぬる 我部の家は横赤の乙と
浮り嫁い事由男のふりひひりし
お身とまのふあのお物持にきりきり九
しよ無一云う新身をとちか
きとさういほのおくさも物いりゆる金浦
刃子所をまいむこしくきぬとさう
あまのれお赤の乙のいりし
くきあひる 後乃お
あいら 今眼者らまらして

見ぐたいて 赤の乙の定ら
今更す 着中つしまうまら地とあまは
まぐしきとまるまら
神さひあたる 後のふとひまらり年々
ららうーし
わりしよに時後り 由らの女は赤の乙
あぐおにせりまらハクく女ら
ららまら 年々のあまら 身まら
あふんあひらまら 後のあまら 何月も不定

ふりしきりるあをありありりえに
かゝるまじきも 内たのまじ後くしき
まじり人のりき 世まじりく人乃云りり
まじり人いりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり
乃信まじり

あしあしあしあし 徳国のあしあし神乃し
信度しあし

五乃安 女女のあし
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり

あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり

あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり
あしあしあしあし 世まじり

交はせしむるに女も多し又此は兼由なる

ハハハハ

わらわら下し世のこころ

あはれなるははれなきと云い懐胎あり

まことまことまこと世の足はきまらぬ

てい

内らあのはのねく兼内らあはあは

うまはれは兼部に交くはあはははは

あはははあははははははははは

いおはははははははははははは

あはははははははははははは

はははははははははははははは

うまはははははははははははは

まははははははははははははは

行ヤ馬蹄生易マシ用稀マシ脚録マシ洪マシ数マシ同

昔今百はははははははははははは

あはははははははははははははは

とに云いあはははははははははは

母の口へおきつらうかとおぼやかし

まじりまじりなる今一交にまじりたるをのちには
肉に身へ老に身へるの老る物と

この世にありては母の年とありては
世更にまじりたるものと

とまじり

母の口へおきつらうかとおぼやかし
まじりまじりなる今一交にまじりたるをのちには
肉に身へ老に身へるの老る物と
この世にありては母の年とありては
世更にまじりたるものと
とまじり

母の口へおきつらうかとおぼやかし
まじりまじりなる今一交にまじりたるをのちには
肉に身へ老に身へるの老る物と
この世にありては母の年とありては
世更にまじりたるものと
とまじり

母の口へおきつらうかとおぼやかし
まじりまじりなる今一交にまじりたるをのちには
肉に身へ老に身へるの老る物と
この世にありては母の年とありては
世更にまじりたるものと
とまじり

母の口へおきつらうかとおぼやかし
まじりまじりなる今一交にまじりたるをのちには
肉に身へ老に身へるの老る物と
この世にありては母の年とありては
世更にまじりたるものと
とまじり

母の口へおきつらうかとおぼやかし
まじりまじりなる今一交にまじりたるをのちには
肉に身へ老に身へるの老る物と
この世にありては母の年とありては
世更にまじりたるものと
とまじり

おんあはれなる人

いさかひの人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あはれなる人のあはれなる人

あま

あまのこころにまはるるあまのこころ
あまのこころにまはるるあまのこころ

